

64.

時候の移り変わりによって季節の感覚の鋭く又周到に行き渡った小説などを讀んだときやはり生き生きとした命の通うのは不思議である。小説の虚構を忘れさせて素直な自然に読者を安心させる。

さて、季語解説にうつる。

花野——いろいろの秋草の咲きまじる野のこと。高原にはお花畠がある。花は桜ということに定められているが花野は違うので注意したい。草の花は秋草の花で秋である。

硯洗ひ——七夕祭の前日に硯をきれいに洗う。そして書道の上達を願うのである。墨滓（すみかす）で汚れた硯を洗うだけでは季語にならぬ。梶の葉という季語もある。梶の葉に文字を書いて七夕様に手向けるからである。梶は桑に似ている。

待宵——名月の前をいう。十五日は月が満ちて名月。望の夜ともいう。降ると雨月であり曇ると無月。十六日は十六夜でまた既望という。十七日が立待、十八日が居待、十九日が寝待、二十日が更待、というように月が遅れて出る。また月が細くなるのである。

古人はかように月に憧れ月を愛でて生活していたことが分かる。

65.

朝夕がどかによろしき残暑かな

右は私の句であるが昨今の朝はひやひやした空気にひたされ爽快さを覚える。ことに残暑が長く厳しい場合ほど切実に爽快感がよく受けられる。

ようやくに残る暑さも萩の露 虚子

庭の萩に白い玉のような露一粒を見て、真昼は暑くても、やれやれ秋だ、残暑の威力は衰えてきたことを知る。

さて、季題解説にうつる。

釣瓶落とし——新季題であるが、昔から言われている。あつという間に秋の太陽が沈んで暮れる。釣瓶を井戸に落とすごとく早いから。

身に入む——もののあわれを感じる事で冷気が体にこたえるごとく秋の季感を強く受け心に染み入る場合を言う。

冷まじ（すさまじ）——涼しを通り越した荒涼たる感じをいう。ものすごく心細い秋の感じをさす。冬に近い気分でもある。

66.

変化しないもの変化するものこの二つが巧に組み合わせられることを、過ぎきし時候を振り返るとき不思議なくらい感じました。

今年の夏はひどく暑いので夏好きの私も夏負けに弱音を吐いたのですがやがて秋がやってきました。長かった残暑も現在はさわやかに澄み切った秋に包まれて快適です。夏から秋に移る軌道は不易です。不易は流行を含めるものであるから面白くなるのだと思います。さて、季語解説に——

神渡——十一月に吹く西風をいう。出雲へ神々が集まるときで出雲は神有月といい、その他は神無月という。木の葉が散ったりとかく荒涼とした景色へと一変する。冨という季題もある。神渡は宗教味が混じっている。

木の葉髪——冬になってこの葉が落ちるように人間の毛髪もまた油気が乏しくて抜け落ちる。そのわびしい感じが伴っている。鳥類の羽抜けるのは夏だから別になる。

木守——きもり又はきまもり。すっかり落葉した木に残る果実をいう。来年の豊作を祈る心が寄せられている。木守柿はよい例。

2024.03.10